

コンチクショウ！！　ぶっ
潰す！！

いちは

親友が、仮面ライダーに蹴り殺された。

社葬の帰り道。

私は、そのままスポーツジムへ行って、入会手続きを済ませた。
さらに、ボクシングジムに寄って入門した。

生まれつき、体は弱い方だった。

それでも、大人になったら、いわゆる「ただの人」にはなりたくないという、
そんな思いだけはずっと持っていた。

大学に入って誘われたサークルは怪しげで、
全学連とか全共闘とか、そういったものを包括したような、
リーダーがとにかく不気味な組織だった。
サークルは、さらに全国の他大学のサークルと連携していて、
年に二回は全国集会があって、とにかく結束力だけは強かった。

大学三年生の全国集会で、横浜の大学に通うヤスシと知り合った。
ヤスシは空手三段、剣道二段、そして何故か書道初段という、いかつい顔をした男だった。
私とヤスシは歳も同じで、下宿も比較的近かったことから、お互いの家を行き来して、夜遅くまで酒を飲んだ。

ヤスシの口癖は、「ぶっ潰す」。

何をぶっ潰すのか、それは分からない。

私の口癖は、「コンチクショウ」。

もちろん、何に対してのコンチクショウかは分からない。

だけれども、私たちには、得体の知れないエネルギーがあった。

何者かになる、という志し。

何かを成し遂げる、という心意気。

上に立ちたい、という野望。

若くて、泥臭くて、どす黒い、そんな気持ちを、

時には鎮めるように、時には鼓舞するように、

私たち二人は安い焼酎を飲んだ。

ヤスシには恋人がいた。

東北出身のタミコという子で、雑種犬のような顔をしていた。

小柄な彼女は気がきく子で、ヤスシの下宿で三人で一緒に酒を飲む時には、
私たちは自分で酒を注ぐことは一回もなかったし、後片付けもしなかった。

タミコが全部やってくれたのだ。

ヤスシは、私という時には亭主関白といった感じで、タミコに対する態度も口も悪かった。

「お前、早く酒をつげ。ぶっ潰すぞ」

ヤスシは、よくそんな風に言っていた。

タミコはこんな扱いをされながらも、どうして一緒にいるのだと疑問に思ったものだったが、
ある夜、私が酔いつぶれて寝てしまい、ふと目が覚めた時、

ヤスシが優しい声でタミコに、「ありがとう」と言っているのを聞いて、妙に納得してしまった。

柔道も剣道も有段者である彼の優しい言葉には、
私なんかには及ばない力強く頼もしい感謝の響きがあった。
そのことに気づいた時、私は、
「コンチクショウ」
と呟いた。

大学を卒業して、私とヤスシは同じ会社に就職した。
ただ、勤務する支社が違っていたので、連絡を取り合うことは徐々に少なくなった。
そして、今年の三月。
ヤスシから、結婚する、という電話があった。
相手は、もちろん、タミコ。
タミコのお腹には、すでに新しい命が宿っているという。
私は、電話口に大声で、
「コンチクショウ」
と叫んだ。
嬉しさが度を超して言葉にならない時、人は言い慣れたセリフしか出ないのかもしれない。

先週のこと。
「もうすぐ俺にも子どもができるんだよなあ」
電話口で、ヤスシは言った。
ヤスシの声は、決して明るくなく、かといって沈んではおらず、
敢えて表現するなら、寂しそうだった。
理由は、すぐに分かった。
「この仕事、子どもがいたらやれないからな。週末ので最後にするわ」
ヤスシは心底、今の仕事が好きだったのだ。
私は、ヤスシの全てを分かっているわけではなかったけれど、
タミコの次くらいには理解しているつもりだった。
「良いじゃないか。おめでとう、コンチクショウ」
私は、それだけ言った。

ヤスシが死んだと連絡があったのは、一昨日のことだ。
駆けつけた私が見たのは、ヤスシの遺体と、お腹の大きいタミコだった。
タミコは私を見るなり、ど汚い雑種犬の顔で大声を出して泣いた。
彼女の金切り声に近い泣き声は、私を現実から引き離してくれた。
私はヤスシの腫れあがった顔を見ながら、ただただひたすらに、
「コンチクショウ、コンチクショウ」
そう呟いていた。

社葬から帰る直前。
タミコに呼び止められた。

涙も流さず、気丈に、彼女は言った。

「ぶっ潰して」

私は、タミコの目を半ば睨むくらいの勢いで見つめながら、

「任せろ。コンチクショウ」

そう答えた。

二十キロのダンベルを持ち上げると、腕がつりそうになる。

「コンチクショウ」

私は叫びながら、腕を曲げる。

ボクシングのスパーで殴られても、

「コンチクショウ」

そう叫びながらヤスシの顔を思い出して、右手でも左手でも、動く方の拳を相手に叩きつけた。

スポーツジムやボクシングジムが終わると、私は家まで十キロを走って帰った。

「コンチクショウ、ぶっ潰す、コンチクショウ、ぶっ潰す」

そうリズムを取りながら。

家の近くに川原がある。

私は、そこで毎日、こう叫ぶのだった。

「コンチクショウ！！　ぶっ潰す！！」

そして、タミコの大きなお腹と、ヤスシの腫れた顔を思い出しながら、

さらに大きな声で誓うのだった。

「コンチクショウ！！　俺がお前をぶっ潰す！！」

来週末、私たちの支社で幼稚園を襲う。

私はそこで、ヤスシの仇を討つ。